



Title	「ロデリック・ハドソン」：ローランド・マレットの視点について
Author(s)	舟阪, 洋子
Citation	大阪外大英米研究. 1983, 13, p. 87-102
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/99066
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

『ロデリック・ハドソン』

— ローランド・マレットの視点について —

舟 阪 洋 子

ニューイングランドの片田舎ノサンプトンの静かな村。ここに住む法律を勉強中の一人の青年が、何の手本も誰の刺激もなしに、見事な彫刻作品を作り上げたところを一人の美術愛好家に見出され、その天分を磨くためにローマに連れてゆかれる。彼はその刺激を受けて一時に才能を開花させるが、一方では、生の誘惑に情熱的に身をまかし、ついには才能も枯渇させて破滅してゆく。ヘンリー・ジェイムズの長編第1作⁽¹⁾のタイトルとなっているロデリック・ハドソン(Roderick Hudson)は、このように典型的にロマンティックな芸術家である。更に、彼を眩惑するクリスティーナ・ライト(Christina Light)は、暗い出生の秘密のからむ絶世の美少女で、金と名誉のために、母親の手でイタリアの公爵と政略的に結婚させられる、というメロドラマのヒロインそのものの女性である。ジェイムズは二十数年後にこれを読み返した時、次作『アメリカ人』(*The American*, 1877)を読み返した時と同じように「ここに描かれている経験は、切り離された、常識的な物事の起こり方にはそっていない経験」であり、従ってこれは「ロマンス」にすぎない⁽²⁾、という批判をしてもよかったのだ。実際彼は『ロデリック・ハドソン』に描かれる内容の不自然さに気づいてはいた。彼はロデリックが抵抗もせずに破滅してゆくのは余りに弱すぎる。その破滅が「早すぎた故に、ロデリックは読者の理解と同情の及ばない人物になってしまったようだ」と嘆じ、しかもロデリックの破滅の原因が彼自身の弱さにあったというよりも、クリスティーナ・ライトにその責任の大半が押しつけられてしまった観を与えるのは説得力の欠けることであった⁽³⁾と反省している。しかし『ロデリック・ハドソン』には、後期のジェイムズの目から見ると、それらの欠点を補って余りある程の或る魅力があった。ローランド・マレット(Rowland Mallet)という作品全体を支配す

る視点の存在である。

ジェイムズの説明によれば、ロデリック・ハドソンの物語を直接的に描くことは、この小説の主題ではなかった。

This it had been but indirectly, being all the while in essence and in final effect another man's, his friend's and patron's view and experience of him.⁽⁴⁾

つまり、この小説の興味の中心はロデリックの友人でありパトロンでもあるローランド・マレットの意識であり、この作品の「ドラマはまさにその意識のドラマである」⁽⁵⁾ということになる。

こう説明されると、初期の『ロデリック・ハドソン』がいかにも後期の作品めいてくるだろう。確かにこの作品は『ある婦人の肖像』(*The Portrait of a Lady*, 1881)よりも統一された視点を持ち、その意味で『使者たち』(*The Ambassadors*, 1903)のあの見事な統一ぶりを思い起こしてもよさそうだが。しかし、ジェイムズが『ロデリック・ハドソン』を執筆当時にどの程度ローランドの視点を意識していたのか、という意地悪い詮索はおくとしても尚、ローランドの意識を検討し直す仕事は必要である。ローランドからイザベル・アーチャーを経て後期のマートン・デンシャーやランバート・ストレザーやプリンスとプリンセスまでの中心意識達を全て「主題を映す最高に磨きぬかれた鏡」⁽⁶⁾として、基本的に同じ役割と見るジェイムズの考え方に疑義を呈し、少なくともこの初期作品の中では、『ある婦人の肖像』や『使者たち』と違って、ローランドの「見る過程」⁽⁷⁾そのものが、そしてそれだけが作品全体のドラマとはなっていないのではないかと反論してみてもいいだろう。

ローランドをイザベルやストレザーからへだてるものは、作者が彼に見せるアイロニーの厳しさである。勿論作者はイザベルの欠点を容赦なく指摘し、ストレザーについても、Ian Watt が見事に解明して見せてくれたように、明らかな作者からの距離がある。⁽⁸⁾しかしこの二人に対しては、作者はアイロニーを置きながら尚絶対的な信用を寄せている。そのアイロニーは(Wattが『使者たち』について使った言葉を使えば)「ユーモラス」⁽⁹⁾である。

別の言い方をすれば、『ロデリック・ハドソン』では客観的真相を語る作者の存在がより大きい、ということになるだろう。ジェームズがローランドを中心意識として設定しながら、彼の見方に信頼を置くことは決してなかったということを考えて、ではローランドの視点は作品の中でどのような役割を果たし、作品のドラマに何を与えているかを今検討してみなければならない。

2

この作品をジェームズの言うように「ローランドの意識」に焦点をあてて読んだ人々の中で、ローランドへの皮肉を読み取らなかった人もいる。ジェームズの喜劇的感覚を論じる Richard Poirier は、この作品の人物達をロデリックの代表するようなメロドラマティックな感受性の持ち主と、ローランドの代表するような理性的でさめた感受性の持ち主の二種類に分け、前者の人々が後者の人々の視点によって「喜劇的」と判定されることに、この作品の「喜劇性」があるのだと論じている。⁽¹⁰⁾ 又、ローランドがこのように「知性と無私の模範的人物」なのではなくて、欠点もある一種のエブリマンだと考える人もいる。⁽¹¹⁾ しかし、ローランドは、より積極的に誤りを犯す人物であり、この点を考えるには、この作品とほぼ同時期に書かれた「デージー・ミラー」(“Daisy Miller,” 1878)の視点を考えてみるのが役に立つかもしれない。この初期の代表的短篇もやはり登場人物の一人ウィンタボーンの視点から書かれている。この作品に関しては、これが本当はデージー・ミラーの物語ではなくて、ウィンタボーンの意識のドラマなのだとジェームズも言っていない。しかし私達がこの作品を読む時、ヨーロッパに長く住んだ結果アメリカ人的感覚を失いかけているウィンタボーンが、ヨーロッパに来てアメリカでと同様に自由に振舞うデージーの姿を見て心を引かれながら、一方で彼女を無邪気で社交的な娘と受け取るべきか、それとも下品で浮わついた娘として非難すべきか、と思いつつ悩む姿の方に関心を引かれることは否定できない。この作品のドラマは、ヨーロッパで誤解されるデージーの悲劇にあるというよりは、デージーの正しい見方について頭を悩ませ続けたウィンタボーンが、「彼女はそんな様々な奇行について愚かで当惑した紳士が頭や心を悩ます必要のな

い娘なのだ」と「ついに恐れをもって、そして付け加えれば、ついに安堵の気持ちをもって」⁽¹²⁾ 決定的な誤解をしてしまうまでの心の動きにある。その後ディジーはまことにあっさりと熱病で死んでしまうが、それは彼女がアメリカ的無垢の代表として、アメリカ人であることをやめかけているウィンタボーンを意識の中に葛藤を引き起こす役割をのみ担っていたことを意味している。彼が最後に誤解をしてアメリカ人であることをやめた時、ディジーの作品の中での役割は終わったのである。

結局「ディジー・ミラー」に於ては「ディジーの本当の性格についてのウィンタボーンの冷酷な誤解のドラマの方が本当はディジー自身の行動よりも大切なのだ」⁽¹³⁾ ということになる。勿論ディジーにまつわる詩、ペーソスは認めねばならないだろう。しかし主に私達が読み取るべきことは、「誤解を運命づけられていた」⁽¹⁴⁾ ウィンタボーンへの皮肉である。今『ロデリック・ハドソン』を考えると、「ディジー・ミラー」に習って、これを「ローランドの冷酷な（とあえて呼んでおくが）誤解のドラマだ」と言ってもいいのではないだろうか。それはローランドのロデリックに対する、クリスティーナ・ライトに対する、更にはロデリックの婚約者メアリー・ガーランド(Mary Garland)に対する誤解のドラマである。

ローランドとロデリックは正反対であるが故に互いを理解しえない二人として登場する。Cornelia Kelly は二人が「一人の完全な人間（ジェームズと言ってもよい）の二つの面を代表しているようだ」⁽¹⁵⁾ と言い、Leon Edel は「まるでヘンリー・ジェームズが芸術家としての自己を二人の人物に分けたようだ」⁽¹⁶⁾ と言っているが、その通り二人は互いを得て初めて完全になれるような存在なのである。

ロデリックは、ローランドの従妹セシリア(Cecilia)によれば、ヴァージニア出身の家系に属し、「古い南部の傲慢さと貴族的気質をたっぷりと(30)」持ち、マサチューセッツ州ノサンプトンのような小さな村のピューリタンの生き方になじめず、「あらゆること、あらゆる人をののしっている(30)」という人物である。「ニューイングランドの夏のように突然変わる(29)」この若者について、セシリアは「私は唯あのロデリックの場合、環境がとても大きな影響力を持っていると思う

のです(49-50)」と言ってローマに連れてゆかれた時のロデリックの「道徳的精神的安全性(49)」に不安を示している。彼を「追い立てる悪魔(21)」に追い立てられ、芸術家である自己にとっての糧を求めるのに貪欲で、一度に開花して枯渇してゆくロデリックは、「あの人は失敗を恐れていない。…そうロマンティックな人物ですわ。私が今まで会ったどの人よりもロマンティックな(408)」とクリスティーナが考える通りの人物である。

「自分が一文なしの活動的な若い天才であればよかったのに(16)」と願っていたローランドにとって、ロデリックは自己の足りない部分を補ってくれるはずの人物であった。彼は「自分には表現する能力が欠けている。それでも表現の必要性はあるので、僕は閉まった戸を開ける掛け金を毎日手探りで探しているのだ(8)」と言うが、ロデリックは彼にとってまさにその「戸を開ける掛け金」即ち「表現する能力」である。彼がロデリックのパトロンとなってヨーロッパに連れて行き芸術家として完成させようとするのも、彼にとっては自分自身の芸術行為に他ならないのであり、だから彼はそこに「ほとんど創造的と言っていい熱情(48)」を感じるのである。

作品の初めに置かれているローランドの祖父の代からの家系についての長々しい説明は、結局はロデリックを理解しそこねるローランドの背景として、ジェイムズも切り捨てることのできない部分だったであろう。「お堅いピューリタンの家系(9)」に属し、「氷のような微笑と石のようなしかめ面(9)」をする男を父とするローランドは「厄介な程敏感な良心(1)」を持っている。自分の意志で情熱を押えることを知っているこの冷静なモラリストは、他人にも同じであることを要求する。セシリアが、想像力のありすぎるロデリックがヨーロッパの刺激を受けて墮落することを心配すると、ローランドは「人は誠実でさえあれば想像力のかたまりであっても大丈夫ですよ(50)」と言って、ロデリックの誠実さを信じて疑わない。しかしロデリックはセシリアの心配した通りの人物なのだということが、次第に明らかにされてゆく。

“I believe there’s a certain group of circumstances possible for every man, in which his power to choose is destined to snap like a dry

twig.”

“My dear man,” said Rowland, “don’t talk about any part of you that has a grain of character in it being ‘destined.’ The power to choose *is* destiny. That’s the way to look at it.”

“Look at it, my good Rowland,” Roderick answered, “as you find most comfortable. One conviction I’ve gathered from my summer’s experience,” he went on — “it’s as well to look *it* frankly in the face — is that I’m damnably susceptible, by nature, to the grace and the beauty and the mystery of women, to their power to turn themselves ‘on’ as creatures of subtlety and perversity. So there you have me.” (141-142)

人間の自由意志について、ローランドはこれを全面的に肯定し信頼しているが、ロデリック・ハドソンは自由意志が働かなくなり運命が支配する時があることを主張する。ロデリックは「理想的美(96)」と見るクリスティーナ・ライトに出会うと自分の予言通り情熱に押し流されて仕事を続ける意志を失い、彼女を失うと「僕は何もできないのだ。勿論言われたことはするよ。喜んで。でもそれは『する』ということではないだろ(431)」と完全に意志を放棄した態度を取る。一方ローランドは、自分のメアリー・ガーランドへの恋と、彼女とロデリックの婚約を守る努力をすることとを両立させよう意志の人である。彼は芸術家として、又人間として、ロデリックが破滅しかけていることを知った時、その破滅を助けて婚約者を我が物にするという悪魔の誘惑に会うが、内面の葛藤の後で結局それに打ち勝つだけの意志の力を持っている。

ローランドの誤りは、人間にはいかなる人にもいかなる場合にも「選択する力」があると信じたことであり、「環境がとても大きな影響力を持っている」ロデリックに影響されやすい環境に放り込んだことにあった。このローランドの誤りを通して、私達は自由意志に関する限りロデリックの考えの方が(正しい、とはジェイムズは言っていないが、少なくとも)現実的なのだ、と読みとることは可能だろう。確かにローランドの行動は Poirier の考えるように理性的でさめていて称賛すべきものである。しかし現実には個人がどうしようもない或る力が働いて

いることを、彼は知らねばならないのである。そしてそこに、選ぶ意志を持ちながら運命によってそれを妨げられてしまうクリスティーナ・ライトを登場させることによって、ジェームズはローランドの誤りを更に決定的にしようとしている。

Kenneth Graham はこの作品の登場人物達の間で「無言の見つめ合い」⁽¹⁷⁾が多いことを指摘し、この作品を「人間の探究、失敗、そして意思疎通の不可能性のドラマ」⁽¹⁸⁾と規定している。このような言い方はジェームズの後期の作品、特に『鳩の翼』(*The Wings of the Dove*, 1902)や『黄金の杯』(*The Golden Bowl*, 1904)についての方がより適切であるが、『ロデリック・ハドソン』に於てもローランドの誤解のドラマは、Poirierの考えるように喜劇ではなく、悲劇的と呼べる効果をもたらしていることを私は強調したいと思う。

3

ヨーロッパ美しいとされるクリスティーナ・ライトは、嬌慢で自尊心が強く、男の心を引きつけては突き放す気まぐれな女と見える一方で、不思議な誠実さを垣間見させる謎めいた女性である。従ってクリスティーナについては、彼女の「光」(Light)は表面の輝きに過ぎず、彼女はジェームズの「黒髪的女人」("dark woman")の系譜に入ると考える人と、⁽¹⁹⁾彼女は「シニカルなアドベンチャレスというよりはロマンティックな理想主義者」なのであって伝統的な「運命の女」("femme fatale")ではないと論ずる人⁽²⁰⁾との両極端に分れてしまう。これは Edward Wagenknecht が、

From the beginning James gives us a kind of prismatic view of Christina by permitting us to see her through the eyes of those with whom she comes into contact.⁽²¹⁾

と言っているように、彼女が「見られる存在」として、読者が彼女の内面を直接に見る手段を与えられず、他の人物達の必ずしも一致しない意見から判断せざるを得ないからである。ローランドに好意を抱いているらしい画家のブランチャード女史(Miss Blanchard)は「あの人は半分マドンナのようで半分バレリーナのようなですね(195)」と表現し、グランドーニ夫人(Madame Grandoni)は「も

し顔に真実というものがあるのなら、あの子は天使のような魂を持っていて当然ですわね。ひょっとすると本当に持っているのかもしれない(164)」とローランドに話す。前者が嫉妬をまじえ、後者が好意を持って言っているという違いはあるが、二人共同じょうにクリスティーナの天史的(もしくはマドンナの)美しさに打たれながら、それが内面の美しさに通じるものかどうかを問題にしている。芸術家ロデリック・ハドソンにとっては、彼女は理想的美そのものであり、彼はそれ以外の何も求めてはいない。Philip Sicker は、ロデリックは相手の顔形を愛しているだけだ。それに対して、ローランドは相手の人格を理解するにつれてあらわれる「捉えがたい精神的美」を求めているのだと説明する(22)。その通りである。唯、この物語の面白さは、ローランドがクリスティーナの表面の美しさ故にその「精神的美」を信じようとしないう点にある。

ローランドにとって、クリスティーナの美しさは警戒すべきものである。彼は初めて彼女の姿を見かける時、「あの女は危険そうだよ(96)」という感想をもらす。これがまさにニューイングランドのピューリタンの発想であるということは次のロデリックのセリフが指摘している。「もしノサンプトンの人が考えるように美というものがいけないものなら、あの娘は悪の権化ということになるな(96)」。クリスティーナはアメリカ人を母とすることでアメリカ人だとは言えるが、ローランドの目には「彼女の美しさは普通のアメリカ人の美しさの即興的な感じとつり合わない程の長い歴史をへた雰囲気(154)」をもつように見えている。彼女はヨーロッパの美の代表であり、それだけでローランドにとっては危険な存在である。「ローマとは母の言葉の中では、そっと小声で口にすべき悪しき言葉なのですよ(43)」とロデリックの説明するハドソン夫人とローランドは意識の上でほとんど違いはない。そして彼のクリスティーナ観はこれより本質的に変ることはない。

ロデリックやカサマシマ公爵に熱心に求愛されていたクリスティーナは、ローランドに最大の関心を抱いていた。それは彼女の母親も彼女の本当の父親だと暗示されているカバリエーレ(the Cavaliere)も、彼女がローランドの意見だけは尊重していると信じていることで(389)、又最後にロデリックが次のように明

かすことで読者に知らされる。「君は彼女の気に入っていた。彼女の関心を引いたのだ。死ぬ程君が好きだったとは言わないが、君のことがとても好きだったので、もし君が少しでもそれに気づいてくれたらうれしかったと思うよ。…彼女自身がそう言うだけで(505)。」クリスティーナが彼に恋していたわけではない。唯彼女にとってローランドは、彼に信じてもらえるということが彼女の生き方の誠実さを証明する、という類の人物であったのだ。彼女は「私は貴方の御意見が気になるのです。何故か分かりませんが(210)」と言い、「貴方は忠実な友、親友、何でも打ち明けられる友になって下さりそうに思えるのです(209)」と訴える。しかしそれに対してローランドは疑いの目をもって彼女を見るばかりである。

Was this a sincere yearning or only an equivocal purpose? Her beautiful eyes looked divinely candid; but then, if candour was beautiful, beauty, and *such* beauty, somehow carried questions so far! (209)

クリスティーナが美しすぎるということがローランドにその障害となっていることが分るだろう。従って彼女の行動は(気まぐれによるものも勿論あるが、重大な行動は)ローランドに自分の誠実さを認めさせようとする行動であり、これが結果的にロデリックを混乱させ、ますますローランドの疑いが強くなってゆくという経過をたどることになる。

もしロデリックに結婚する程の関心を抱いていないのなら彼をほおっておいてくれ、そうすれば「貴女は僕が非常な敬意を払う行動をしたことになる(288)」とローランドに言われれば、彼女はロデリックを閉め出し、カサマシマ公爵と婚約する。しかし彼女はまだローランドに信じてもらえたとは思っていない。「貴方は私を信じておられないのよ」と彼女は叫ぶ。「無理にでも私を信じさせるためになら、どんなことでもするでしょうに(310)。」

彼女が自分の誠実さを示すために取った最後の行動がカサマシマ公爵との婚約破棄であった。それが母や公爵を、そしてロデリックをどんな混乱に陥し入れるかを彼女は考えてはいない。その行動は彼女も認める通り、ロデリックの婚約者

メアリー・ガーランドに会い、ローランドが彼女の美德を賞讃しているのを見て、
とったことの影響による。それは彼女が愛してやまない「素晴らしい、美しい、力
のある、興味ある世界(406)」を捨て、「ボストンでは人のより気高い自我と呼
ぶのではないのでしょうか(407)」と言うものを選ぶ、彼女にとっては最高の道徳
的選択だったのである。しかし選択する力を尊ぶローランドが、彼女には芝居じ
みたものを感じるだけである。だから彼はその後でクリスティーナが結局カ
サマシマ公爵と結婚したと聞いても、驚こうともしない。彼女の翻心の背後にど
のように彼女にとって屈辱的な事情があったかを察しながら(それは読者にも明
確に語られることはないが、彼女の出生の秘密といふかなりメロドラマチック
なものである)、「そう、彼女は明らかにつかみそこねるなんてことはしないか
ら(420)」という言葉には同情が感じられない。クリスティーナの行動につれて
絶望から狂喜へ、さらに絶望へと突き落されたロ德里ックが、彼女は自分のため
に結婚しないと約束したのに、「どんな約束の守り方をしたか見ただろう」と叫
ぶ時も、「かわいそうに、あの娘はできるだけのことをしたのだよ」と力なく弁
護するだけである(480)。

三カ月後カサマシマ公爵夫人として不幸な生活を送っているらしいクリスティー
ーナが最後に登場する時、彼女には悲劇的な雰囲気が漂っているように見える。
ローランドはそれを見、彼女が「友情が介入する力をもたないような方向に顔を
向けてしまった(492)」ような気がして恐れを抱くが、彼女のその時の言葉は、
せっかく見つけた「より気高い自己」を捨てざるを得なかった悲しみで悲劇的で
ある。

“You’ve seen me at my best. I wish to tell you solemnly, I was
sincere. I know the whole look of it’s against me. . . . There’s a great
deal I can’t tell you. Perhaps you’ve guessed; I care very little. You
know at any rate I did my best. It wouldn’t serve; I was beaten and
broken; they were stronger than I. Now it’s another affair!” (492)

「本当にあの時は誠実に行動したのです(494)」ともう一度念を押して退場してゆ
くクリスティーナを見て無言のローランドの姿は、人間の意志を全面的に信じ

ている道德家が、よりよく生きようという意志を持ちながら環境(又は運命)に負けて意志を放棄せざるを得ない状況に置かれた人間に見せる冷酷な無理解そのものを意味している。

この無理解はロデリックに向けられるものと同じである。

“If you’ve the energy to desire you’ve also the energy to reason and to judge. If you can care to go you can also care to stay, and, staying being the more profitable course, the inspiration on that side, for a man who has his self-confidence to win back again, should be greater.” (502)

カサマシマ公爵夫人に再会したロデリックが全てを忘れて彼女の許に行くためにローランドに借金を申し込んだ時のローランドのセリフである。老母と婚約者を捨ててクリスティーナの許に走ろうとする利己的で自分勝手なロデリックに翻心をうながす言葉として、この言葉は理性的で正当なものである。しかしローランドはロデリックに「理性で考え判断する力」を期待することに於て、そしてそれを果たせなかった時、ついに自分が理性を失ってロデリックの利己主義を非難し、自分が秘かに彼の婚約者メアリー・ガーランドを愛していたことを告げることに於て、取り返しがたい誤りを犯すことになる。彼の無理解は、それが間接的にあれ、ロデリックの死の原因となるという罰を作者によって与えられることになる。

4

このローランドが一目見て恋に落ちるのがロデリックの婚約者メアリー・ガーランドである。この女性が作品の中で十分に人物化されなかったために、ジェイムズの意図したメアリーとクリスティーナの対比というねらいが不発に終わってしまったことは、『ロデリック・ハドソン』を読んだ人々が一致して指摘している。ジェイムズは序文でその意図を説明しているばかりでなく、⁽²³⁾ローランドの意識の中でも二人がしばしば対比されるように書いている。彼にとっては、クリスティーナは「誰でもが少しは恋をするような女 — 美しく、まばゆいばかりで、男の

心を引きつけるに巧みで、簡単に人の関心を引くような女」の一人であり、それに対してメアリーは「美人であれ不美人であれ、顔の美しさはそれ程重要でなく、恋をされることはめったにないが、恋される場合は必ず永続するというような女性」の一人である(124)。彼にとってのメアリーの魅力は「貴方があの方を賞めていらっしゃるとしたら、あの方は人間の美德を全てそなえていらっしゃるはずです。貴方にはそうでなければいけないのですから(379)」というクリスティーナの言葉が正しく指摘している。二人の女性が初めて出会う場面で、ローランドは「この二人の非常に興味深い女性のほとんど劇的といっている対比(377)」に打たれるが、彼の選択が完全に終わってしまっていることは明らかである。

しかしメアリー・ガーランドはロデリックを選び、最後まで気持を変えなかった。何故という疑問はローランド自身の疑問として取り扱われる。彼はロデリックと自分程違う二人が同じ一人の女性に恋したことを不思議に思い、ロデリックが恋したのは「単に二人が異性同士であったこと、偶然そばにいたこと、若さ、同情、親切の結果(176)」であると考え、メアリーについては(ためらいつつも)「そのような決定的瞬間にあれば、どんな娘でもロデリックの多分センチメンタルな要求に答えたり(177)」とまことに都合よく考えて希望をつないでいる。

しかし実はメアリーはヨーロッパを体験してローランドにはできなかったような変化をとげるのである。彼女はローマ到着第一日目から「落着きなく興奮していた。彼女は部屋を歩き回り、しばしば窓際に行った。彼女は全てを吸収した。(326)」と表現されている。「ここに来て一時間で私の胸から消えてしまった哀れな小さな過去が気の毒で(333)」と言って「ニューイングランドの中心地から来た若い娘という基盤(336)」を捨てることなく、尚「ある意味では今までローランドが見たこともない程の心からの敬意をローマの魔力に払っている(332)」のである。イザベルやストレザーのように、アメリカという基盤の上にヨーロッパの経験を受け入れる柔軟さがジェイムズにとっての美德であるとすれば、メアリー・ガーランドはまさに一つの理想像としてこの作品に登場していると考えられる。彼女は芸術家ロデリックの妻になるために意識的にヨーロッパの美に身をさらし、美を謳い上げるところにまで変化をとげる。

“Beauty stands there. . . . and it penetrates to one’s soul and lodges there and keeps saying that man wasn’t made, as we think at home, to struggle so much and miss so much, but to ask of life as a matter of course some beauty and some charm. This place has destroyed any scrap of consistency that I ever possessed, but even if I must myself say something sinful I love it!” (457)

Sickerはメアリーの内面的変化を高く買い次のように説明する。

.....she is so intoxicated by her sip of Italy and so fascinated by the development of her own consciousness that she becomes psychologically self-sufficient. (24)

面白い言い方ではあるが、むしろ、メアリーは少くともローランドを越え、ロデリックの美の追求を完全に理解できる段階に到達した、と言う方が真実に近いだろう。嵐のアルプス山中で行方不明になったロデリックを案じるメアリーが、ローランドに「貴方になら見つけられるのでしょうか。行って下さったら役に立つでしょうか(517)」と危険な探索を暗示する時、「彼女の最初の衝動が彼(＝ローランド)を犠牲にすることだった(518)」ことに衝激を受けるのは、「秤かけると自分の方が重みを増してきた(517)」と夢見ていた愚かなローランドだけで、読者にとっては当然の結果であったと言わねばならない。

ローランドにも遂に自分の誤りを理解する日がやってくる。自分の一時的に理性を失った言葉がロデリックの死を招いたことを思った時、「この最も理性的な男が情熱の暗い場所をさまよい道に迷い、自分の『行為』を残酷で不当だと鋼のむちでむち打った(525)。」そしてロデリックが転落した「大きな荒涼とした悪しき絶壁(525)」を見て考える。

.....it had but done *its* part too, and what were they both, in their stupidity, he and it, but dumb agents of fate? (525)

運命を否定し、意志を常に発揮していたローランドが、情熱に押し流され、自分が「運命の手先」であることを初めてここで悟るのである。ロデリックを失った自分の人生が「まるで破産して閉鎖された劇場のように空虚で人けがなく不吉

なものに思える(526)」ローランドは、その後の人生をアメリカで過ごすことになる。度々メアリーに会いながら彼女を勝ち取る望みも持たず「僕は世界一我慢強い男なのだ(527)」と語るローランドの姿は、救いのない人生の放棄(renunciation)を表わしているようである。

5

『使者たち』の中でストレザーはこのようなことを言う。

(The affair of life) is at the best a tin mould, either fluted and embossed, with ornamental excrescences, or else smooth and dreadfully plain, into which, a helpless jelly, one's consciousness is poured ——— so that one 'takes' the form, as the great cook says, and is more or less compactly held by it; one lives in fine as one can. (25)

ローランドは結局このようなことを悟ったのであった。しかしストレザーは更に続けて、でも人間には「自由の幻想」⁽²⁶⁾があるのだ、と説く。自由を重んじるイザベル・アーチャーは、自分自身で選んだつもりだった結婚に他の人の手 ― そして運命 ― が介入していたことを知った時、夫の許に戻るという一見不可解な選択をして、自己の自由意志を確認しようとする。

ローランドにはそのような機会は与えられていないが、いや、与えられていないからこそ、私達はこの初期の作品の中に『鳩の翼』や『黄金の杯』に見られるような絶望を読み取るのである。「生きる意志があるならば生きられる」(“One could live if one would.”) よりは「生きられるなら生きる」(“One would live if one could.”)の方が現実にあっているのだ、とミリーの悟った真理⁽²⁷⁾が語るような意志を持つ人間の存在の弱さが、白い絶壁の下でロゼリックの遺体と共に救助を待つローランドの姿に示されている。

NOTES

- (1) Henry James, *Roderick Hudson* (1875). テキストは New York Edition, Vol. 1 を使用。本テキストよりの引用頁数は本文中()内におさめる。尚 *Roderick Hudson* はジェイムズの長編第一作ではないが、彼自身が第一作 *Watch and Ward* (1871) を無視してこう呼んでいた。
- (2) Henry James, *The Art of the Novel: Critical Prefaces*, ed. R.P. Backmur (New York, 1934), p. 34. 以後これを *Prefaces* と省略する。
- (3) *Prefaces*, pp. 12-13.
- (4) *Ibid.*, p. 15.
- (5) *Ibid.*, p. 16.
- (6) *Ibid.*, p. 70. (Preface to *The Princess Casamassima*)
- (7) *Ibid.*, p. 308. (Preface to *The Ambassadors*)
- (8) Cf. Ian Watt, "The First Paragraph of *The Ambassadors*," *Henry James: Modern Judgements*, ed. Tony Tanner (Bristol 1968).
- (9) *Ibid.*, p. 294.
- (10) Richard Poirier, *The Comic Sense of Henry James: A Study of the Early Novels* (London, 1960), p. 12.
- (11) Kenneth Graham, *Henry James: The Drama of Fulfilment: An Approach to the Novels* (Oxford, 1975), p. 33.
- (12) Henry James, "Daisy Miller," New York Edition, Vol. 18, p. 82.
- (13) Wayne C. Booth, *The Rhetoric of Fiction* (Chicago, 1961), p. 283.
- (14) "Daisy Miller," p. 93.
- (15) Cornelia Pulsifer Kelley, *The Early Development of Henry James*, rev. ed. (Urbana, 1965), p. 191.
- (16) Leon Edel, Introduction to the Torchbook Edition (New York, 1960), p. xiii.
- (17) Graham, *op. cit.*, p. 40.
- (18) *Ibid.*, p. 55.
- (19) Philip Sicker, *Love and the Quest for Identity in the Fiction of Henry James* (Princeton, 1980), p. 44.
- (20) Edward Wagenknecht, *Eve and Henry James: Portraits of Women and Girls in His Fiction* (Norman, 1978), p. 71.

- (21) *Ibid.*, p. 62.
- (22) Sicker, *op. cit.*, pp. 46-47.
- (23) *Prefaces*, p. 18.
- (24) Sicker, *op. cit.*, p. 47.
- (25) Henry James, *The Ambassadors*, New York Edition, Vol. 21, p. 218.
- (26) *Ibid.*
- (27) Henry James, *The Wings of the Dove*, New York Edition, Vol. 19, p. 254.